



【冒頭 1 分要約：15 年分析が導いた結論】

【結論】資料問題で必要なのは「資料を全部じっくり読むこと」ではなく「資料の関与度に応じた視線の選別」である。

2012～2026 年度の 15 年間の出題データを分析すると、大問 1 の資料問題には以下の明確な特徴がある。

1. 資料の役割は一律ではない：「資料そのものの読解が不可欠な問題」「資料は場面想起のきっかけに過ぎない問題」「資料があっても実質は知識問題」が混在している。
2. 3 大系統の存在：
 - ・ **資料必須型**： 資料内の数値変化・親族関係・文言そのものが正答決定の中心となる。
 - ・ **資料補助型**： 資料から時代やテーマを特定したら、思考を教科書知識へ即座に切り替える。
 - ・ **知識中心型**： 設問の指定語句・条件から知識を直接出力し、資料は時期確認程度にとどめる。
3. 設問文を先に見る原則： 資料を先に眺めてはならない。「設問文で探す情報を決めてから資料を見る」ことで、無駄な読み込みを減らし、必要な情報を正確に処理しやすくなる。

★ 資料に飛びつくな。まず設問文の要求を確認し、「その資料をどの深さで使うか」を決めよ。

第 1 章：15 年間の資料出題データと 3 つの関与度

1. 15 年間の出題データから確認された客観的事実

- ・ 資料提示の常態化： 過去 15 年間、略年表・系図・史料文・統計グラフ・絵図・写真などの資料を伴う設問が毎年出題されている。
- ・ 見かけと中身の乖離： 資料内に答えが直接示されていない問題（補助型・知識中心型）も複数確認されている。一方、系図や統計グラフでは、資料の客観的事実を正答決定に利用する資料必須型の例も確認できる。

2. 資料関与度の 3 類型

- ・ 類型 1：資料必須型（必須資料）
資料中の数値変化、親族関係の線、銘文の文言など、資料そのものから事実を抽出・照合しなければ正答を決定できない形式。
- ・ 類型 2：資料補助型（補助資料）
資料は時代・テーマ・歴史的状況の特定を助けるきっかけにとどまり、正答決定の中心は教科書知識にある形式。
- ・ 類型 3：知識中心型（知識中心）
設問条件と教科書知識を中心に正答を決定でき、資料は時期や文脈の確認程度にとどまる形式。

第2章：資料問題の視点選別「解法ロジック」

手順1：設問要求の確認と「探す情報」の決定

問題文を読んだら、まず末尾の問いかけと指定条件を確認する。

- ・「資料から読み取れる事実をもとに～」 「グラフの数値の変化にふれて～」
→ 【資料必須型】と判断。資料から具体的な事実を抜き出す準備をする。
- ・「資料に示した建築物（絵図）に代表される～」 「資料の時期に行われた～」
→ 【資料補助型】または【知識中心型】と判断。頭の中の知識を検索する準備をする。

手順2：資料関与度に応じた「視線の配分」

関与度の判定に応じて、資料と設問文に向ける意識を切り替える。

- ・ **資料必須型**： 資料の該当箇所（数値の逆転、婚姻線、史料の文言）を重点的に精読する。
- ・ **資料補助型**： 資料から時代・人物・テーマを特定するために必要な手掛かりを確認し、視線を即座に設問文と知識想起へ戻す。
- ・ **知識中心型**： 設問文の指定語句から教科書知識を直接出力し、資料は年号や文脈の検算用に流し見する。

手順3：答案パーツの結合と論理整合

- ・ 必須型の場合：[資料から抽出した客観的事実] + [指定語句・歴史概念] を結合して答案を組む。
- ・ 補助型・知識中心型の場合：[設問の要求] + [教科書知識の因果関係] を直接言語化する。

第3章：実戦定着ドリル（授業内演習・全15問）

※答え合わせで不正解だった場合は、解説を見る前に「なぜ間違えたと思うか」をチェック欄から1つ選ぶ。

【系統1：資料必須型演習（問1～問6）】

※資料中の数値、親族関係、文言から決定打を正確に抽出しなければ解けない問題群。

【問1：略系図の読解（藤原氏の摂関政治）】

次の略系図を見て、藤原氏が朝廷で強い権力を握ることができた仕組みについて、「きさき」「即位」の語句を使って説明せよ。

【略系図】

藤原氏

↓

娘 = 天皇

↓

皇子（次の天皇）

【解答欄】

答：_____

誤答原因：[☐ 知識不足 ☐ 資料読解 ☐ 条件処理 ☐ 関与度判定 ☐ その他（ ）]